

ドンキーの翼

登場人物

- 鵜乃目邦二郎……(うのめ・ほうじろう) 童話作家
鵜乃目詩織……(うのめ・しおり) 邦二郎の娘
相馬亮……(そうま・たすく) 詩織の婚約者
鏑木良治……(かぶらぎ・よしはる) 詩織の母の昔の恋人
森崎葉子……(もりさき・ようこ) 訪問者
河本健吾……(こうもと・けんご) 葉子の恋人
熊田伸介……(くまだ・しんすけ) 熊田モータースの社長
三好雅弘……(みよし・まさひろ) 邦二郎の生徒・塾講師
篠原心音……(しのはら・ここね) 邦二郎の生徒・天然
笹野真奈美……(ささの・まなみ) 邦二郎の生徒・
熊田絵里香……(くまだ・えりか) 邦二郎の生徒・伸介の妹
岡本伸子……(おかもと・のぶこ) 邦二郎の義理の姉、詩織の叔母
島田智則……(しまだ・ともりのり) 出版社の編集者
少女……(しょうじょ) 座敷童子・幼い頃の詩織のイメージ

舞台は古い日本家屋、岡本家の居間。舞台中央に二階の伸子の部屋に繋がる階段。上手奥に玄関への通路。下手奥には台所と風呂場、そして邦二郎の部屋に繋がる通路の入り口、舞台下手の客席側に詩織の部屋に繋がる通路がある。舞台の最前面、最も客席側は張出舞台で、抽象エリアとなり、その下手にも出はけ口がある。舞台中央の奥に応接六点セットがある。ソファ椅子で正面奥が三人掛けの長椅子、その前面にテーブル。右左に一脚ずつ肘掛の付いた一人椅子がある。部屋には上手の壁に沿ってサイドボードも設置されている。

夜、皆が寝静まった時刻。台所から箱に入った饅頭と湯飲みを持って現れる鶴乃目邦二郎。三人掛けのソファに腰を下ろし、テーブルに皿と湯飲みを置き、にっこりと笑う。一口お茶を飲み、饅頭に語りかけるように話し始める。

邦二郎

「寝る前に饅頭食べるなんて自殺行為ですよ、自分の歳と饅頭のカロリーを考えてください」ですか。くくあの眼で睨まれたら、思わず「はい」なんて返事しちゃって、もう条件反射だもん。(苦笑)しかし、皆が寝静まるのを待って饅頭を食らう：居候は辛いね。(一口かじる)うん、(美味い)：飲めない男のやけ酒ならぬやけ饅頭。(上手奥に少女登場)：そりやあ分かってますよ。亮君はいい男だし、これはめでたい話だし：。

階段を降りて現れる少女(座敷童子)、邦二郎に気づき、ちよつと邦二郎を見た後、隣に座る。邦二郎には少女が見えない。邦二郎が再びお茶を飲もうと

湯飲みに手を伸ばすと、少女が湯飲みの位置をずらす。驚く邦二郎。

邦二郎 ……ん？

邦二郎、戸惑いながら、もう一度湯飲みを取ろうとするが、また少女が湯飲みをずらす。驚いている邦二郎を見て楽しそうな少女。辺りを見回し、今度はゆつくりと湯飲みに手を伸ばす邦二郎。邦二郎の手に合わせ、ゆつくり湯飲みをずらす少女。動く湯飲みを見つめる邦二郎。湯飲みが止まった時、邦二郎の視線が湯飲みを掴んだ少女の手を辿り、少女と目が合う。

邦二郎 あ…(驚愕)

少女 うそ…おじさん、あたいが見えんの。

邦二郎 ……詩織？

少女 は？

邦二郎 (恐る恐る)詩織、だよね？

少女 何言ってるの、

邦二郎 いや、そんな筈は…(まじまじと少女を見る)

少女

おどろいた、大人には見えない筈なのに。

邦二郎

確かに大人には見えない、何で子供なんだ。詩織お前、どうしてこんな姿に、(両手で顔を触ろうとする)

少女

ちよ、ちよっと待ってよ、

邦二郎

これじゃ結婚出来ないぞ、亮君には何て言ったら良いんだ。(肩を掴み)詩織、詩織、

少女

おじさん落ち着いて、落ち着いてったら、あたい詩織なんて名前じゃないし。

邦二郎

え…(一瞬我に返り)そ、そうだよね、詩織の筈はない。だって詩織はもう…(まじまじと少女を見て)しかし、何から何まで、子供の頃の詩織に…いや、どこからどう見てもあの頃の詩織そのものだ。ほら、お気に入りのこのリボン、それにこの帯…(少女の着物の袖を)この着物…。

少女

ちよっと、やめてよおじさん。

邦二郎

死んだ母さんの着物を解いて仕立て直した奴じゃないか。やっぱり

詩織だろ、

少女 あくそうか分かった、分かったよおじさん。

邦二郎 ん？

少女 そう言えばね、そんな事書いてあった。(袂から手帳を出し捲る)えつと、(邦二郎の視線を感じ)あ、これね、一千十三年版、座敷童子の手引。

邦二郎 え、

少女 あった、第八章、例外的事象。ごく希に成人した人間の中にも座敷童子の姿が見えてしまう種類の人間がいる。これだ。(邦二郎を指さす)

邦二郎 ん？

少女 おじさん、詩織って誰？

邦二郎 …詩織は、私の娘だよ。

少女 そ、あたいはね、おじさんの娘じゃなくて、座敷童子。

邦二郎

…座敷、童子(少女の姿を上から下まで見て)なるほど。

少女

信じるんだ。

邦二郎

う、うん、冷静に考えたら、詩織の筈はないから…。

少女

おじさん面白いね。

邦二郎

何が、

少女

普通はね、大人はこんな話を簡単には信じないんだよ。だから大人にはあたい達が見えないんだよ。

邦二郎

まあ、それを信じるような人間だから、私には見えてるって事かな。

少女

あ、そうか。

邦二郎

これでも童話作家の端くれで、

少女

なるほど、童話作家。

邦二郎

でも、どうして詩織にそっくりなんだ？

少女

それについてもね、ここに補足で書いてある。(手引きを見て)このような例外的ケースに於いて、つまりおじさんの事ね、この種の人間には座敷童子の本質が見えている訳では無く、その人物と関わりのある最も身近で愛情を寄せる存在の容姿を借りて認識される場合が多い。つまり、おじさんに見えてる私の姿は、おじさんが大切に思っている誰かさんって事。

邦二郎

しかし、詩織はもう大人だよ。だけど君は子供の頃の詩織にそっくりで、

少女

もしかしておじさん、あの頃は良かったとかって思ってるんじゃないの。

邦二郎

えっ…。

少女

ねえ、その娘さんに近頃何かあった？

邦二郎

いや、もうじき結婚する事が決まったくらいで、他には何も。

少女

それだ。

邦二郎

え、

少女 おじさん、娘さんの結婚で、ちよつと寂しくなつてんじやないの。

邦二郎 …まあ、少しは、

少女 やつぱり。娘さんが子供だった頃の事とか考えてたでしょ、だからよ。

邦二郎 それ(手引き)にそんなことも書いてあるの？

少女 (手引きを見て)個別のケースをそこまで詳しくは書いてないけど、大体分かるよ。

邦二郎 そう、

少女 それよりさ、おじさん、結構ダメダメでしょう。

邦二郎 ダメダメ、

少女 だって色々書いてあるよ。(また手引きを読む)この種の人間は社会生活への適応性に欠け、向上心も薄く、現実逃避と見られる行動に走りがちである。(邦二郎を見て)結構まわりから、だらしないうと
かかって言われない。

邦二郎

まあ、

少女

やっぱりね。

邦二郎

…あの、座敷童子ちゃん、

少女

何その呼び方。

邦二郎

君は、ずっとこの家に住んでいたの？

少女

ううん。これからここに引っ越そうかなって考えてるところ。

邦二郎

これから、越してくる？

少女

そう。今住んでる家がさ、リフォームの話決まって、安っぽい新材で立て替えるの。それで転居先を物色してて、この家は築年数も結構経ってるし、居心地良いかなって。

邦二郎

そうなんだ。(納得した後、懐かしそうに)…それにしても、昔の詩織にそっくりだ…。

少女

何感傷に浸ってるのよ。

邦二郎

いや、そういう訳じゃ、

少女

…娘さん、優しいの。

邦二郎

ああ、とつても。

少女

そう。良かったね。

邦二郎

カミさんが早く亡くなったから、母親の顔も知らない子だけど、優しくして良く出来た娘なんだこれが。情けないけど、みんな父親が娘に育てられたって言ってるよ。(笑)

少女

(笑)だったら尚更、おじさん今こそしっかりしなくちや。面倒みてくれてた娘さんがお嫁に行っちゃだもん。歳相応にちやんと自立しなくちや駄目だよ。

邦二郎

そうだよね。

少女

そうよ。おじさんが生きてるのは現実の世界だもん。あたいなんかが見えるようじゃ駄目なんじゃない。

邦二郎

え、

少女

(笑)本当は会えなくなった方が良いと思うけど。縁があつたら、またね。(上手へ向かう)

邦二郎

あ、ちよつと待つて。

少女

何、

邦二郎

これ、(饅頭を)食べて見せてくれないかな。

少女

…お饅頭。

邦二郎

詩織、近頃じゃダイエツトとかかって、甘い物は余り食べなくなったけど、子供の頃は饅頭なんか大好きだった…口いっぱい頬張つて食べる顔が、可愛くてね。

少女

…おじさん。

— 暗転 —

明るくなつて朝。詩織、台所より花瓶に生けた花を持つて登場。サイドボードの上に

花を置き、しばし眺めて納得の様子。

詩織

うん、これで良し。掃除も一通り終わって、客間のテーブルクロスも換えましたと。えっと、次はシャツのアイロンか、

亮

(台所洗面所口より亮登場) 風呂場の引き戸、ガタつき直ったよ。

詩織

ありがとう。じゃあ物置の棚を吊り直して、

亮

それはもう終わった。次は何やればいい？

詩織

さすが亮、仕事が早いね。

亮

言ったら、大工仕事は任せてって。

詩織

やっぱ男はこうじゃなくっちゃ、ウチじゃお父さんが何も、(できないから、)

亮

(外から帰って来た邦二郎に気付き)詩織、

詩織

あれ、お父さん。散歩じゃなかったの？

邦二郎

う、うん。

詩織　　今、出掛けたばかりでしょ。

邦二郎　　雨が、降りそうだから、やめた。

詩織　　雨？

亮　　降りますか？そんな感じじゃ、

邦二郎　　いや、天気予報でね、確か、そんなことを言ってた。

亮　　そうなんですか。

邦二郎　　うん。だから：部屋で、本でも読もうかな。

下手奥に退場する邦二郎。怪訝そうに見送る詩織。

亮　　（邦二郎を眼で見送った後）で、僕は何をしたら、

詩織　　お父さんを見張ってて。

亮　　え、

詩織

何か様子が変でしょ。お父さんがまた何かやったら、今度こそ伯母さんの血管切れちゃいそうだし。

亮

この間の事、伯母さんまだ怒ってるの？

詩織

まあ伯母さんは年中怒ってるけど、この間のは原因がちよつと下らなさすぎ。饅頭食べ過ぎとかって、何、

亮

でも一人で十個人一箱全部だもん、確かに体には良くないよ。

詩織

まあね。とにかく二人が仲良く出来るように、お父さん見てて。

亮

了解。

詩織、自分の部屋に戻る。亮は邦二郎の後を追おうとして、奥から出て来る邦二郎の気配に、慌てて下手手前の柱の陰に隠れる。暫くして邦二郎が辺りを伺いながら出てくる。その手には伊勢エビと赤飯を盛った皿。誰も居ないと思ひ、ほっとした様子で玄関に向かう。後ろから声をかける亮。

亮

お父さん、

邦二郎

(振り返る)…亮君、

亮　　またお出かけですか。雨、降るんじゃないんですか。

邦二郎　　…雨ね…降るのは北海道だって…だから、

亮　　それ持って、お散歩に。

邦二郎　　うん、これは…これはね、

亮　　どうするんですか。つまみ食いにしては、ちよつと大胆ですよ。

邦二郎　　いや、さすがに伊勢エビのつまみ食いは、

亮　　じゃあ、どうするおつもりですか。

邦二郎　　私が食べるんじゃないんだ。ちよつと、その…。

亮　　もしかして、誰かにあげようとしてますか？

邦二郎　　…うん。さつきね、外に出ようとしたら玄関先に人が座り込んで、

亮　　はい？

邦二郎　　いや、だから…ホームレスさん、かな。

亮 ホームレス？

邦二郎 うん、

亮 で、それあげちゃうんですか、

邦二郎 おなか空いてるみたいだから。

亮 お義父さん、それまずいでしょ。

邦二郎 やっぱり、

亮 はい。また伯母さんに怒られますよ。

邦二郎 そうなんだよね、それが問題なんだよ、それは分かっているんだけど。

亮 分かってたらそれ、返すしかないでしょう。

邦二郎 でも、食べて貰いたいなくって。

亮 何言ってるんですか。

邦二郎
だって、今日はめでたい日じゃない。君と詩織の婚約を祝ってみんなが集まる。

亮
だからこそです。こんな日に、

邦二郎
こんなめでたい日に我が家の玄関先に人が座り込んでるんですよ。
見過ごしには出来ないでしょう。

亮
うん。じゃあ、せめて何か他の物にしませんか。百歩譲っても伊勢エビは。

邦二郎
そうだよね、やっぱり…これはやり過ぎだよね。

亮
ええ。

邦二郎
…分かった…冷蔵庫に、何かあったかな。(しょんぼりと下手奥に向かおうとする)

亮
お義父さん。

邦二郎
ん、(立ち止まり、振り返る)

亮
…どうしても、それをあげたいんですね。

邦二
郎

…いや、そういう訳じゃ…。

亮

顔に書いてありますよ。でも、どうして。

邦二
郎

…お腹が空いてるって本当じゃないじゃない。でもそんな時にこんなごちそうが食べられたら、それこそどんなに嬉しいだろうって思っちゃって。それに、こんな日に我が家の玄關先に座り込んでるなんて、何だかウチのお客さんみたいで、だったら我が家の幸せを一緒に祝って貰いたい、なんて…変かな。

亮

…(苦笑い)…分かりました。

邦二
郎

え、

亮

協力しますよ、お義父さん。

邦二
郎

本当、

亮

でも、詩織には内緒ですよ。

邦二
郎

当然だよ。

亮 男同士の秘密です。

邦二郎 男同士の秘密かく何かワクワクするね、楽しいね。

亮 はい。でも、どうしましょう、料理が一人分足りなくなります。

邦二郎 じゃあ私の皿に食べ終わったエビの殻を載せておくか。

亮 それ子供欺しです。

邦二郎 やっぱり。

亮 じゃあ、僕がうっかりエビを一匹床に落としたことにしましょう。

邦二郎 いや、それは、

亮 床に落ちたエビなんて縁起が悪いから捨てた、そうしましょう。

下手、手前より静かに伸子登場。気付かない二人。

邦二郎 それじゃあ君に申し訳無いよ。

亮 いいんですよ。お義父さんが落としたなんて事にするより、話がす

んなり収まりますから。

邦二郎
まあ確かに、亮君は伸子さんのお気に入りで、その方が穩便に事が運ぶかな。

亮
じゃあ、早くそれ、そのホームレスさんに持って行ってあげましょう。

邦二郎
(嬉しい)そうしようか。

伸子
そうは行きませんよ。

邦二郎
あ…姉さん、

亮
叔母さん、

伸子
邦二郎さん、あなたって人は…本当に、

亮
あ、あの…。

伸子
亮さん、

亮
はい、

伸子 詩織の夫になる貴方にとって、この邦二郎さんは義理の父親になる訳です。

亮 そうですね。

伸子 だから本来、私は詩織の無くなった母親の姉として、あなたには、幾久しく末永くこの邦二郎さんを実の父親と思つて、とかなんとかつて言うべきなんでしょうけど、私にはとてもそんなことは言えません。言えることはこれだけです。亮さん、あなたくれぐれもこの人には騙されないようにして下さい。

邦二郎 あの、姉さん、

伸子 詩織の叔母として、あの子のめでたい日に、こんな話をしなくてはならない事が、本当に本当に残念ですけど……亮さん、

亮 はい、なんでしょう。

伸子 この人は、どうしようもないろくでなしなんです。

亮 あの、伯母さん、

伸子

母親を亡くした幼い姪が不憫でこの人を我が家に入れたのがそもその間違いだったんですけどね、私は、この三十年近い長い歲月、この人の奇行に悩まされ続けて来たんです。

亮

奇行、

伸子

そう、正に奇行、変人のあり得ない言葉や行いです。その最たるものが、この人がお為ごかしに振りかざす偽善です。みんなそれに欺されるんです。でもそんなのは誰のためでもなく全部自己満足と欺瞞の産物なんです。

邦二郎

姉さん、話が難しくくて、ちよつとついて行けません。

伸子

(邦二郎を睨む)人の良さそうな笑顔も、誰彼構わずかける優しい言葉も、この人がやってることは全部パフォーマンスなんです。

邦二郎

パフォーマンスって、

伸子

自分の生活も支えられない人間が、毎度毎度他人の問題に首突っ込んで、最後には手に負えなくなつて私や詩織がそのツケを払う。無責任で甲斐性無しで行き当たりばつたりの大嘘つきで：今日は何か、娘のめたい結納の料理を、ホ、ホ、ホ、ホームレスに、意味が分かりません、意味が、

邦二郎

姉さん、あの、

伸子

やめて頂戴、五つも六つも年上のあなたに姉さんと呼ばれる事からして我慢出来ないんだから。

邦二郎

でも私、姉さんの妹の、夫で、

伸子

はく(絶望)何でこんな人を…あんなに賢かった里子が…あの子が唯一犯した大きな過ちです。(恨めしそうに邦二郎を見る)

邦二郎

(苦笑い)そんな…。

亮

あの、伯母さん、今日のことは、お義父さんだけじゃなくて、僕も、

伸子

亮さんは欺されただけです。邦二郎さん、これは最後通告です。その料理を今すぐ台所に返して来なさい。さもなければ、詩織と亮さんの結婚式が終わったらすぐに、あなたには、あなたにはこの家から、

熊田(声)

詩織く大変だく

伸子

何、

熊田 (上手から飛び込んでくる) 大変だ、大変だ、大変だよ、

邦二郎 熊ちゃん、

熊田 あゝ先生、おばちゃん、

伸子 何ですか、いきなり、

熊田 何ですかじゃないよ、暢気な顔してまったくよく。

邦二郎 何かあったの。

熊田 何かあったかかって、聞いて驚くなよ。もうちよつとでこの家、大変だったんだよ。あんたらみんなおっちゃんじまうとこだったんだから。

亮 ですから熊田さん、何があったんですか。

熊田 放火だよ、放火、

亮 放火って、

熊田 この家に火つけた奴がいんだよ。

伸子

え、この家に誰か火をつけたの、

熊田

そうですね。それも今の今だよ、まったくあんたら。てめえんちの玄関先が大騒ぎになってんのに、誰も出てこねえから、気付いてねえんじやないかと思っただけど、案の定だ。

伸子

誰、誰が、ウチに火なんか、

熊田

ああ、たった今、犯人はおまわりに捕まったばかりだよ。

邦二郎

犯人って、

熊田

こ汚ねえ格好して髭はやした男だよ。

邦二郎

髭、あ、

亮

お義父さん、

邦二郎

…あの、その犯人、帽子、被ってました？

熊田

ああ、被ってたね、薄汚れたハンチング。

邦二郎

あ…そうですか、

亮　　もしかして、お義父さん、

伸子　　あなたの大切な、ホームレスさん、なのね。

邦二郎　　あゝ、とりあえず、これ(皿)、台所に戻しましょうね。(消え入るような声で)もう食べる人も、いなくなっちゃったし。

鬼の形相で邦二郎を睨みつける伸子。

— 暗転 —

熊田の笑い声が響き、明るくなる。椅子に座っている心音、真奈美、絵里香、雅弘、得意げに話している熊田。

熊田　　まゝこの家の皆さんはどなたもこなたも。パツパラパーで極楽トンボだからよ、俺も付き合ひ長いし大抵のことにやあ驚きやしねえけどさ、先生と来たら詩織とあのモヤシ野郎の祝いの料理を、あろう事かてめえんちに火つけようとしている放火魔に振る舞おうとしてたつつかうから、もう笑うしかねえよ。(大笑)その後おばちゃんに睨まれた先生の顔と来たひにや、

絵里香　　(怒鳴る)もういい加減にしてよ、馬鹿兄貴、

熊田　　何だよ絵里香、いきなり、

絵里香

さつきからみんなが兄ちゃんのおしゃべりにウンザリしてんのが分かんないの。

熊田

馬鹿野郎この野郎、俺はこんなことじゃ危ないからみんな気をつけてなあっていう教訓を垂れてだな、

絵里香

ひとんちの災難を楽しそうにペラペラ喋ってんじゃないわよ。

熊田

おめえが聞きたいのは耳障りのいい話ばかりか。こういう耳に痛いことを話す人間がいなくて、それでこのご町内の平和が守れんのか。甘っちよろい事ばかり言っててこの日本の、いや世界の平和が守れるのかって話なんだよ。今度だって俺がいなかったら今頃この家は、

絵里香

兄ちゃん何もしないで野次馬の先頭に立って騒いでただけじゃないの。

熊田

何だどこの野郎、

絵里香

「何があったんですか何があったんですか」ってうるさく騒いで、最後は邪魔だからってお巡りに説教食らったっていうじゃないの。

熊田 何で知ってんだよ。

絵里香 心音が電信柱の影からみてて、ハラハラしてたのよ。

心音 いえ、ペコペコ頭下げてて、ちよつと面白かったです。

熊田 …何だ、この野郎。

雅弘 あの、熊田さん、少し静かにしましようか。僕ら先生が落ち込んでるって聞いて、今日は先生を励まそうと思って集まってる訳ですし、俺だって気持ちと同じだよ、だけどな、人それぞれの励まし方ってのがあんだよ、それをこいつは妹のくせに、

真奈美 うん、絵里香が悪い、

熊田 だろ、

絵里香 何だよ、

真奈美 馬鹿に馬鹿つってもどうしようも無いの。

絵里香

そうか。

熊田

か〜どいつもこいつも、

真奈美

とにかく熊ちゃんさ、私たち今日は対策も考えたいの。

熊田

対策？

真奈美

今回は岡本のおばちゃんもさすがに我慢できないって、詩織の結婚式が終わったら先生をここから追い出すって宣言したのよ。

熊田

本当か、

雅弘

そう、そうなんです。

真奈美

先生がここ追い出されて路頭に迷ったら教室も無くなる訳でしょ、結構切実なのよ。

熊田

まあ、デビュー以来ずっとスランプって作家の創作童話教室なんて元々風前の灯火だったけどな。

雅弘

そんな事言わないで下さいよ。

真奈美

熊ちゃん、何だかんだ言ってここにいるみんな、先生には絶対に教室を続けて欲しいんだから。

熊田

それが不思議だよな。お前ら本気で勉強するつもりなんて更々無いだろ、そもそも邦二郎先生の教え方に期待もしてない、なのに先生の教室が無くなったら寂しくはなる。

心音

だって、先生見てると癒やされるんですよ。

熊田

何セラピーだよそれ。

雅弘

でもそれ言えてますよ。ここに来て先生が煎れてくれるコーヒーを飲んで、先生の話を聞いていると、職場であった嫌なことなんて全部どうでも良くなります。

熊田

じゃあ愛想のいいマスターがいて美味しいコーヒーを出す喫茶店探せばいいだろ。

雅弘

プロが煎れるコーヒーなんて全然ダメです。

熊田

何で、

雅弘

熊田さん分かってない。同じ人が煎れるとはとても思えない程、

濃すぎたり薄すぎたり毎回味の違う先生の煎れるコーヒー、

熊田
腹立たねえかそれ。

雅弘
味なんてどうでも良いんですよ。出されたコーヒーをこうやって
(身振り)一口飲むでしょう。そしてテーブルにカップを置くと、先
生が心配そうな顔で訊いてくるんです、どおって、その眼がキュー
トで。

心音
あく分かれますそれ。

熊田
分かんねえよ。

絵里香
話だってそうだよ。先生最初はウチラに聞かせる為に話してくれ
てるのに、途中から自分が物語に夢中になったりして、

心音
登場人物と話し始めたりするんですよ。

真奈美
この間なんか凄かったね。先生、頭の中の物語の展開に言葉が追いつ
かなくなつて、「えっと、それで、それでね」って繰り返したか
と思つたら、しばらく眼だけがあちむいたりこつち向いたり、そ
して急に静かになつちやつて、どうしたんだろうって見てたら、大
きく息を吐いてすっこく嬉しそうに「あくめでたし、めでたし」っ

て。

絵里香

そうそう、そうだった。(熊田以外、笑う)

心音

そして気まずそうに言ったんですよね「あつ、ごめん」で。

雅弘

キュートですね。

熊田

分かん。

絵里香

だから先生の良さが分かんない馬鹿はここにいないくていいんだよ。

熊田

うっせー鼻くそ、

絵里香

帰れ、馬鹿兄貴、

熊田

あれ、五年生で寝ションベンした奴、誰だったつけ。

絵里香

本当、帰れ、

熊田

やっぱり秘密にしといてやるよ、さすがに五年生は恥ずかしいもんな。

絵里香

頼むから死んで、（笑っている熊田）

真奈美

熊ちゃん、いてもいいけど静かにしてね。

絵里香

ホント信じらんない、

心音

仲いいんですね。

絵里香

誰が、

熊田

じゃあ真奈美、面倒くせえけど俺も知恵貸してやるよ。

真奈美

だから熊ちゃん、いて良いから邪魔しないでよ。

熊田

おう。（絵里香に）へへへっ、混ぜて貰った。（絵里香ウンザリ）

雅弘

じゃあ本題にもどりましょうか。どうやったら先生がここを追い出されずに済むかってことですが。

真奈美

言い換えると、ここんちのおばさんの怒りを静める為に、私たちに出来ることが何か無いかってことね。

熊田

こりやかなり難しい問題だよ。

真奈美

詩織の話だと、おばさんは亡くなった旦那さんが残してくれたこの家をもう少しで火事で失うとこだった、今度ばかりは先生のことを許せない、て言ってるらしいの。

熊田

だろうなく。もうおばちゃんの中じゃさ、ほとんど先生がこの家に火点けたって感じだもん。こいつは超難問だ。

雅弘

それを僕らとしては何とかしなくちゃ、

熊田

いや無理だね。

絵里香

何だよ。

熊田

おばちゃんは日頃から先生見ると虫ずが走るとかかって言ったんだよ。それが今度のことですべて完全に切れちゃったから。

心音

熊ちゃんさん、ネガティブ発言ばかりですね。

絵里香

真奈美さん、やっぱりこいつ追い出そう。

真奈美

熊ちゃん、

熊田

問題解決の為には現実を見なきやダメだろ。

絵里香

無理だ無理だって言ってるだけじゃない。

心音

あの、

雅弘

何ですか、心音さん。

心音

今更ですけど、どうして詩織さんの伯母さんは先生の事がそんなに嫌いなんですか。それが分かったら…。

雅弘

まあ、確かに。

絵里香

ただの相性の問題でしょ。先生はノンビリおばさんはカリカリ、性格、真逆だから。

心音

それだけですか。

絵里香

それだけって、身内で相性が悪いって最悪よ。(熊田を)

熊田

何だよ。

心音

でも、相性が悪くても、そんな大っ嫌いって、

絵里香

うん、まあそうだよ、あの邦二郎先生を大っ嫌いって…。

熊田

(少しふざけて)こいつは昔、何かあったな。

雅弘

(少し考えている様子の真奈美に気付き)真奈美さん…。

真奈美

…ん、うん。

雅弘

何かご存じなんでしょうか。

真奈美

…ご存じって言うか…詩織に聞いた話はある。ほら私、ずっとこの近所だし、詩織が小さいときから知ってるし。

熊田

あれ、俺はそんな話聞いてねえよ、どうなってんだい、俺だって詩織とは、

絵里香

うるさい。

心音

真奈美さん、

真奈美

…あくでもそれはずっと昔の話だし、今回の問題解決に繋がるようなことじゃ無いと思うから。

雅弘 ……そうですか。

下手奥より盆に載せたお茶と菓子を持って詩織が登場。

詩織 お待たせしてごめんなさい。(テーブルの上に盆を置き)これ頂き物

なんだけど。

心音 うわあ、ありがとうございます。

雅弘 どうも。

絵里香 美味しそう。

詩織 食べながら、もう少し待ってて。

絵里香 先生は、

詩織 もうじき出てくると思う。

真奈美 何やってるの。

詩織 うん。今度の事、自分でもかなりショックだったみたいで…。

絵里香

で、

詩織

反省文書いてる、私たちの命まで危険にさらしてしまったりとかつて。

雅弘

じゃあそれをおばさんに、

詩織

ううん。そんなことしたら、かえってまた怒りの炎に油注いじやうから、心にも無い事をつて。お父さん伯母さんには信用ゼロだから。

熊田

じゃあどうすんだよ、その反省文。

詩織

壁に貼ってじっと見てるだけ。

心音

先生、かわいいそう。

雅弘

あの、そもそもこちらのおばさんは、どうしてそんなに先生の事がお嫌いなんですか。

詩織

…うん。昔、色々あったの。

絵里香

昔って、

詩織

(笑)伯母さんの口癖「あなたの親はボタンの掛け違いで結婚したんだから」失礼よね、じゃあ私はボタンの掛け違いで生まれた子なのって話じゃない。

心音

それって？

詩織

元々お母さんには婚約者がいて、伯母さん曰く、その人はハンサムで背が高くてもっとも誠実で、とにかく絵に描いたような素敵なお人だったらしいの。だから家族みんなが二人のことを応援してたんだって。ところがそこに突然現れた冴えない男が、つまりウチのお父さんなんだけど、猛アタックしてお母さんを奪い取ったって所から話が始まるの。

心音

え、あの先生が、本当ですか。

絵里香

結構、意外なんだけど、

詩織

でしょ。あれでウチのお父さん、昔はかなり情熱的だったみたいよ。「若気の至り」なんて話もあるし。

真奈美

詩織、

詩織

あく若い頃はって話ね。

伸子

(上手より声)さあさ、どうぞ、お入りになってください。

詩織

伯母さん帰ってきたみたい。続きはまた今度ね、

心音

え、

詩織

ちよつと失礼。

伸子

(声)本当にありがとうございます。

詩織

お客さん、(上手に退場しながら)お帰りなさい伯母さん。

心音

先生の若い頃の話、ちよつと気になりますね。

絵里香

そう、私は今の先生が一番。

心音

そうですね。

真奈美

ほらほらみんな、おばさん来たら愛想良く、愛想良くね、

雅弘

あくそうですね、熊田さんもお願ひしますよ。

熊田 俺がおばちゃんに、今更何を、

雅弘 いやただ失礼の無いようにってことですよ。

絵里香 兄ちゃんはとにかく何も喋らないこと、

熊田 おく分かったよ、石になってやるよ、空気になってやるよ、

絵里香 そうして、壁のシミにでもなってる。

熊田 この野郎、

真奈美 熊ちゃん、

雅弘 上品に、上品に、

熊田 (皮肉に微笑み)上品に、上品に、

詩織 (声)そうですか、でもお会いできて良かったよね伯母さん。

上手から登場する詩織、伸子、葉子。かしこまって迎える一同。

真奈美

おばさん、お邪魔しています。

雅弘

いつもお騒がせして申し訳ありません。

心音

お邪魔しています。

絵里香

お世話になってます。

熊田

え〜本日はお日柄も良く、

絵里香

ふざけないの。

伸子

詩織、この人達何なの。今日は、

詩織

うん。教室の日じゃないけど、みんな昨日の騒ぎの事を聞いて心配して集まってくれたの。

伸子

そう。(一同を見回すように見て)皆さんお暇なんですね。

(気まずい雰囲気)

真奈美

…あの、大変でしたね、おばさん。

伸子

真奈美ちゃん心配してくれてありがとう。でも、大丈夫、詩織から聞いていると思うけどこの子の結婚式が終わったら、那二郎さんにはここから出て行って貰うんです。

真奈美

その話なんですけど、おばさん、

伸子

そうすればほら、この家も平和になるから。

熊田

おばちゃんさ、そんなに、急いで決めなくても、

伸子

詩織の結婚式は半年先なの、半年もあるのよ、のんびりし過ぎてるくらいよね。私には遠い遠い未来のような気がするわ。

詩織

おばさん、お客様もいらしてるし、その話は後で又、

伸子

森崎さん、ちよつとだけゴメンなさい、すぐですから。

葉子

あ、いえ、どうぞ。

詩織

伯母さん、

伸子

ちゃんと言っておかないとね。(向き直り)もちろん皆さんには何の恨みもないんですよ。でも私も主人が残してくれたこの家を守らな

きやならないから、邦二郎さんにここについて貰う訳にはいかないんです。皆さんがお教室をおやめになるのか、どこかに場所を移されるのか、それは私ごとやかく言う事じゃありませんけど。

詩織

おばさん、今日はもう、

伸子

それから詩織、幸せになりたいんなら亮さんまで巻き込んじゃダメよ。

詩織

え、

伸子

あなたが大きな間違いを犯さないように、昨日、亮さんのご両親がお帰りになる前に話しておきました。

詩織

伯母さん、あちらのご両親に何か言ったの。

伸子

二人の新居に父親が転がり込むなんて話が出たら、絶対にお許しにならないでくださいねってお願いしておきました。

詩織

はあ、

伸子

あなたと亮さんが考えそうなことは分かっていますから。

詩織

何で、そんな勝手に、

伸子

叔母として当然のことをしたまです。

詩織

まったく、

伸子

詩織、私分かってますよ。教室の皆さん勘違いはしてるけど、まがりなりにもウチの家族の心配をしてくれてるわけですよ。考えてみたら、おかしな身内より他人様の方がよっぽど有り難いです。こちらの森崎さんにしてもそうです。そりゃあなたにとっては父親かも知れませんが、邦二郎さんは、

詩織

おばさん、

熊田

あれ、おたく昨日、ここの玄関先でお巡りと話してた…。

葉子

はい、森崎と言います。

熊田

えっと…今日は、

伸子

熊ちゃん、こちらが最初に気付いて大声を出して下さって、それで人が集まって、警察が駆けつけて、何とかこの家は燃やされずに済んだの。さっき警察に行ったら森崎さんもいらしてて、紹介を受け

たのよ。

熊田

なるほど。

伸子

幸い、邦二郎さんの事も伊勢エビの話も出ませんでした。私もさすがに恥ずかしくてそんな話は出来ませんでしたよ。とにかく、森崎さんにはちゃんとお礼したくて来て頂いたの。

詩織

本当にありがとうございます。

心音

あの、失礼ですけど、ご近所にお住まいですか。

葉子

あ、いえ。

心音

そうですね、お見かけしないし。

絵里香

でも、表の通り、この先は行き止まりだし…昨日は何を…。

葉子

はい、あの、こちらに伺うつもりでした。

詩織

え、

葉子

はい、「ペガサスの涙」を読んで、一度あの物語を書いた先生にお

会いたくなってる。

伸子

は、

雅弘

…そうなんですか、

葉子

はい、

熊田

そうか、あ、それで、

伸子

ペガサスって…あの、邦二郎さんの、

熊田

なるほどね。おぼちゃん、こちら、先生の書いた話に感動して先生に会いに来て、それで放火魔を見つけて、あくなるほどね。

伸子

えっ、あの、そうなんですか…。

雅弘

ペガサスの涙、いい話ですよ。みんな、あれで集まったんですよ、ここにいるみんな。

— 暗転 —